

# 2013年—図書館の現況とフィクションの中の図書館

—図書館はどうみられてきたか・14—

佐藤 毅彦

## Relationship between the library in fiction and actual library

—Images of the library (14)—

SATO Takehiko

**Abstract** : I examined, in this paper, the images of library that appear in the TVdrama (“Biblia Koshodo no Jiken Techo”) and the novel (“Umi no Mieru Machi”), and discussed them comparing with the actual situation of library.

要約：テレビドラマ『ビブリア古書堂の事件手帖』や小説『海に見える街』の中に登場する図書館のイメージを検討し、実際の図書館の状況と比較して、検討した。

### 1. はじめに

今年（2013年）、4月30日の「図書館記念日」を直後に控えた週末の4月27日（土）、映画『図書館戦争』実写版（出演・榮倉奈々、岡田准一ほか）が公開された。メインキャストは、雑誌『ダ・ヴィンチ』誌上で実施した読者アンケートで、もっとも希望の多かった2人であったという<sup>1)</sup>。実写ではあるが、ストーリーとしては、虚構性の強いもので、現実の図書館やその周辺を取り巻く事情が、くわしく描かれているわけではなく、あくまで、架空のストーリーの中で、図書館が舞台となって物語が展開している。

映画の公式ホームページには、「映画『図書館戦争』をより楽しむための用語集」があり、10あまりの用語について解説されているが、「図書館法」のみが現実存在するもので、他は、この物語の中に登場する架空の名称のものについての解説である。「図書館法」についても「通称『図書館の自由法』」「『図書館の自由に関する宣言』をもとに立法化」「図書館だけが唯一、検閲に対抗できる法的根拠を持つ組織となった」というように、解説の内容は、あくまでもこの物語で

の状況に関してのものである<sup>2)</sup>。他の用語は、すべて、この物語の世界に特有のもので、現実には存在しない<sup>3)</sup>。

映画のポスターには、「撮影協力：自衛隊 陸上自衛隊 航空自衛隊」と表示されているが、撮影地に関する情報は記されていない<sup>4)</sup>。今年（2013年）公開された『図書館戦争』は実写であるため、現実の図書館が撮影のロケ地として使われている。映画の公式ホームページで、撮影に使用されたことが明らかにされているのは、現・山梨県立図書館、旧・山梨県立図書館、水戸市立西部図書館、十日町情報館、北九州市立中央図書館、であるが、いずれも、吹き抜け、広い空間、など建築的に特徴のある施設である<sup>5)</sup>。これらのうち、山梨県立図書館、十日町情報館では、『図書館戦争』の公開に合わせて、展示などの企画が実施された<sup>6)</sup>。映画の公開とコラボレートするかたちで、実際のロケ地となった図書館でのイベントが企画・開催されたことは、フィクションの作品と現実の図書館サービスの協調の事例として注目される。

映画『図書館戦争』の公開から数日後、「図書館記念日」にあたる、4月30日の『読売新聞』（大阪本社版）には、「図書館変身中」という見出しの記事が、

社会面のトップに掲載された<sup>7)</sup>。この記事では、図書館の民間委託について、図書館流通センター大阪支社長のコメントとして「『人員削減で、司書を雇う余裕がない自治体が外部に運営を委託した結果、民間感覚のサービスが広がった』と分析」していることを紹介し、「公立図書館の『お堅い』イメージを覆すのは佐賀県武雄市の図書館だ」として、CCC(カルチャー・コンビニエンス・クラブ)に運営を委託、館内ではスターバックスも営業しており、「来館者数は昨年同期に比べ、5倍」となったことをとりあげている。

紙面の一部には、塩見昇・大阪教育大学名誉教授の「『経済効率だけで安易に民間委託すると、図書館行政のノウハウが蓄積、継承されないおそれもある』」というコメントも掲載しているが、記事の分量としては、民間委託を積極的に評価する内容が大きな部分を占めている。

読売新聞と同系列の読売テレビでは、この記事が掲載された4月30日、朝の情報番組「す・またん」において、キャスターの辛坊次郎が、各紙朝刊を紹介するコーナーで、この記事を取りあげ、解説していた。

「図書館はどうみられてきたか」というテーマで、フィクションの作品における図書館の描かれ方について、検討してきたが、今年は、『図書館戦争』実写版の公開にあわせて、撮影のロケ地となった一部の図書館で展示企画が開催される一方、公開直後の4月30日には、「図書館記念日」を意識したと思われる「図書館の業務委託」に関連した記事が、全国紙(『読売新聞』大阪本社版)に掲載され、同系列のテレビ局の朝の情報番組で、キャスターのコメントが放送された。こうした中で、フィクションの作品での図書館の扱われ方と、現実の図書館に関する現象面にかかわる報道とを対比させて考察することで、図書館イメージの現況の一端を、知るための手がかりを得られるのではないかと考えた。

## 2. テレビドラマ

### 『ビブリア古書堂の事件手帖』

『ビブリア古書堂の事件手帖』は、古書店とその関係者に関するストーリーが、文庫本で刊行され、話題をあつめていた。テレビドラマ『ビブリア古書堂の事件手帖』は、2013年1月から、11回にわたって、フジテレビ系列で放映された<sup>1)</sup>。ドラマのストーリーは、小説の設定や登場人物をふまえたものだが、必ずし

も、小説のストーリーがそのままドラマ化されているわけではない。

第5回(2013年2月11日放送)は、『時計じかけのオレンジ』に関する感想文が話題となり、自分で書かず他人の感想文を書き写した生徒が出てくるのは、小説と共通しているが、ドラマでは、小説にはない、古書を学校図書館に寄贈するシーンがある<sup>2)</sup>。

番組の最初の部分で、『時計じかけのオレンジ』の文庫本がアップでうつされ、ドラマのヒロインで古書店の女性による、「本や映画が子どもたちに与える心理的影響は、非常に大きいとよく言われます。名作と言われる文学作品のなかにも、過激な暴力描写や性描写を含むものは、数多く存在していますが、それを読んで共感した子どもは、いずれ同じような行動をとりかねない、そう考えることは、はたして、正しいのでしょうか」というモノログが、背景に流される。

その直後のシーンで、古書店の車で、「私立聖桜女学館」という学校に、寄贈する図書を運び込むと、図書委員の女子生徒が、台車を押しながら「お手伝いします」と申し出る<sup>3)</sup>。図書室では、学校教員と思われる(ドラマの後半では、教室内で、生徒に万引きに関するアンケートを実施している)メガネをかけた女性が、運び込まれた図書群をみて、書名を一瞥し、積み上げられた本の中から『時計じかけのオレンジ』(文庫)、『美徳の不幸』(文庫)、『愛の生活』、『密使 他(マゾッホ選集4)』、『もうひとつの肌』、など、数冊をとりだし、「こちらの本は、中学生が読むには、不適切だと思われます。大変申し訳ないのですが、ご遠慮させていただきます」と言って、寄贈を断っている<sup>4)</sup>。ヒロインは、「あの、どれも、文学的に、大変評価の高い作品ばかりです。性描写や、暴力描写が……」と言いかけるが、「本が子どもに与える影響というのは、想像以上に大きいんです。たとえば、最近も、この本を(『時計じかけのオレンジ』の文庫本を提示しながら)読んで、学校の体制を批判するような感想文を提出した生徒がいました」「どんな感想文ですか」「誰かにおしつけられて、いい人になっても、ほんとうに、いい人になったことにはならない。それなら、まだ、悪いことをやっているほうが、人間らしい、そんな内容でした」というやりとりがあり、そこから、『時計じかけのオレンジ』の感想文に関係するストーリーが展開する。

ドラマの放送から数か月が経過した、2013年夏には、松江市の小中学校における、コミック『はだしのゲン』の学校図書館における扱いに対する、松江市教

育委員会の指示をめぐる状況が大きく報道された。『カレントアウェアネス-E』では、「新聞、テレビ等のマスメディア」で「表現の自由、知る権利の保障、表現が子どもに与える影響、歴史認識、図書館の在るべき姿や役割など」について議論が起こったことを紹介している<sup>5)</sup>。

学校図書館での資料の扱いに関して、学校図書館には「司書教諭」「学校司書」などの関係者が存在することや、こうした学校図書館の直接の担当者はどのように対応しようとしたのか、といった点については、図書館関係者の視点からの報道はあったが、社会全体の関心としては、教育委員会での決定までのプロセスや、『はだしのゲン』のストーリー、コミックの絵に関するものなどが中心であった<sup>6)</sup>。

松江市は、市立の小中学校全校に、学校司書を配置するなど学校図書館の充実に注力してきた自治体である。また、松江市と合併した、東出雲町は、学校図書館を活用した教育実践に取り組んできた地域でもある<sup>7)</sup>。しかし、今回の問題について、一般的なメディアの報道では、「学校図書館」やその直接の関係者は、存在感が希薄なものとしか感じられなかった。

テレビドラマ『ピブリア古書堂の事件手帖』では、ヒロインの古書店関係者の文学作品に対する思いを、学校図書館を担当するステレオタイプな女性教員が、寄贈を拒否することで拒絶する、というストーリーになっていたが、現実には、学校図書館の担当者の存在すら意識されていない報道が、『はだしのゲン』の扱いをめぐる状況の中で現出していた。

### 3. 畑野智美『海に見える街』

#### 3-1. 畑野智美と『海に見える街』をめぐる言説

畑野智美は、1979年東京生まれ。大学卒業後、アルバイトをしながら、小説の創作を続け、『国道沿いのファミレス』で、2010年「第22回小説すばる文学新人賞」を受賞。『海に見える街』は、2013年「第34回吉川英治文学新人賞」候補作となった<sup>8)</sup>。

『海に見える街』というタイトルで知られている固有名詞としては、スタジオジブリの映画『魔法の宅急便』の中で使われている曲がある。畑野智美『海に見える街』においても、「魔法の宅急便のキキみたい」(p.117)、『魔法の宅急便みたいだね』(p.276)といった表現が使われていることから、作者の畑野智美が、映画『魔法の宅急便』を意識して使っている固有名詞であると思われる。この小説の中に、特定の地名

を表す固有名詞は出ていないが、書評の中には「鎌倉とか湘南辺りを思わせる」と指摘しているものもあった<sup>2)</sup>。

なお、表記は異なるが、『海に見える町』は、伊藤整の小説のタイトルにも使われていて、こちらには、「小樽高商」(現・小樽商科大学)の図書館を描写した場面が含まれている<sup>3)</sup>。

『海に見える街』は、各紙誌の書評にとりあげられているが、図書館を背景としたキャラクタ設定については、「物語の舞台は図書館」<sup>4)</sup>、「登場するのは、図書館で働くどこか不器用な男女4人」<sup>5)</sup>、「舞台設定に派手さはない」「海が見える市立図書館で働く男女4人の群像劇」「登場人物はみな、恋愛絡みのトラウマを抱えている」<sup>6)</sup>、などと紹介されている。

文芸評論家の北上次郎は、「畑野智美は間違いなく現代エンタメ界の次代のエースだと断言する」<sup>7)</sup>と評価しているが、ストーリーの人物設定については、「もうすぐ三十二歳になる図書館員本田君」「真面目で融通がきかない後輩の日野さん」「児童館の職員松田君」「派遣職員の鈴木春香」の「四人が順番で語り手となり、図書館を中心にした日々が語られていく」。共通項は「友達がいない」「あるいは極端に少ない」ことで、「畑野智美が書き続けているのは、友達のいない人間たちの物語」である。それは、友達が一人もいないという意味ではない、親友が一人いればいい、ということで、畑野智美が書き続けているのは、その一人と(あるいはもう一人と)出会うまでの物語であると述べている<sup>8)</sup>。

「不器用」「恋愛絡みのトラウマを抱えている」「不器用にしか生きて来られなかった」「友達がいない」「あるいは極端に少ない」などと評されている、そうしたキャラクタの人物たちが、二〇代なかばの女性の一人は非正規職員だが、三〇代の男性と、二〇代なかばの女性、の二人は正規職員として勤務している職場が、公立図書館なのである。

畑野智美は、『WEB本の雑誌』で発表されている「作家の読書道」でのインタビューで、これまでの図書館とのかかわりや、読書遍歴、作品としての『海に見える街』の背景、などについて、詳しく語っている<sup>9)</sup>。

図書館との出会いについては、「世田谷で育ちました」「家の近くに出来た区民センターの中に児童館や図書館が入ったので、そこで本を借りました」と、世田谷区の区民センターの中に設置されていた図書館をあげている。『海に見える街』のストーリーの中での

図書館については、多くのアルバイトを経験したことはあっても「図書館で働いた経験はないんです」ということで、「家の近くの図書館が児童館も併設されていたせいか、司書さんの事務室も見通しがよかったです。普通の図書館とは雰囲気違って、みんなせかせかしてなくて子供たちと視線を合わせている感じでした。無断持ち出し防止の装置も一切なかった。「小学生くらいからそうした様子を見て騒いで怒られてきたので、『海の見える街』のモデルだといえます」と、世田谷区の区民センター内の図書館状況が、ストーリーづくりのヒントになっていたことが語られている<sup>10)</sup>。

他には、「中高一貫の学校」で、「村山（由佳）さんの本を図書室で借りて読んで」「司書の先生に言ったら、江國香織さんの『きらきらひかる』を薦められて」読んだこと、などが語られている。また、指定校推薦で進学した東京女学館短大では、他に利用者のいない「図書館で哲学の本や志賀直哉や島崎藤村を読んできました」という。

### 3-2. 『海の見える街』の図書館

#### 3-2-1. 図書館の施設と業務内容

このストーリーの舞台となる図書館は、「市民センター」の一階に受付と体育館、喫茶店があり、「二階に児童館と」「小会議室」、「三階が図書館」(p.7)で、「職場から海が見える」(p.8)。「図書館は山の上の方」(p.84)にあり、「半分は子供専用のスペースで、他の図書館より絵本や児童書の数が多い」(p.12)。また、「市内に図書館が分館を入れて七館」(p.10)あるという。

「図書館も市民センターも開館時間は九時」(p.8)であり、「図書館は月曜日が定休」だが、職員は「週にもう一日休みを取れる」(p.19)、「図書館が休みの月曜日以外も週にもう一日は休む」(p.120)という勤務体制である。

業務内容の一例としては、開館前の準備作業について、「返却ボックスに入っていた本の返却手続」をし、「予約が入っている本をピックアップ」する。市内の図書館の「予約や貸出の状況はインターネットで調べられる」ので、「他の図書館で予約が入っている本がうちの図書館にあれば取っておいて、市内を循環している車に配達してもらう。予約本を探しながら、棚の整理もしていく」(p.10)という状況が紹介されている。

時間帯による業務内容について「絵本の読み聞かせ

会や紙芝居もあって、午後は忙しくなる」ので「事務仕事や書棚の整理はできるだけ午前中のうちに」すませること、「利用者さんが少なくともやることはたくさんある」が、「たまに本当に何もやる事がなくなり、カウンターに座ってぼうっとしてしまう時がある」(p.84) ことなどが記述されている。また、児童館職員の松田くんが、「五時に子供達が帰り」、片づけをして、「図書館に行くとカウンターには日野さんと春香ちゃん」が「仕事帰りの人が多く来る時間帯みたいで、二人とも忙しそうに返却作業をしている」(p.185)で、派遣の春香ちゃんに「『この時間は忙しいんです』」(p.186)と言われるシーンもある。

「本は貸出する前にパソコンにデータを入力」し、「バーコードシールを貼って保護用のビニールシートを貼る」(p.86) こと、「月に一回は児童書コーナーを徹底的に整理して、本の状態を確認する」(p.116) という事実や、「読み聞かせ会は図書館と児童館の合同企画で、週に一回」(p.159)開催されていることも記述されている。

正規職員の本田くんが、派遣の春香ちゃんに、仕事を教える部分には、「『日本十進分類法っていうのがあって』」(p.29)「『本は絶対投げないように』」(p.30)などの発言がある。春香ちゃんは、ストーリーの後半では、書棚の整理をする中で、奥の書棚には専門書があり、日本十進分類法を基準に並べられているが、「どこにどういう本があるかはだいたい覚えた」が「細かく覚えるのは無理」だ、「日本で一日に発行される本は二百冊以上」「年間で七万から八万冊になるらしい」(p.246)と感じている。

#### 3-2-2. 図書館の利用者

近年の図書館の利用状況をある程度意識しているのか、「大きな駅に近いところだと、リストラされた人やホームレスの人が昼寝したりしているらしいけれど、こんな山の上までは来ない」(p.84)という記述がある。一方、「図書館は無料で朝から夜までいられる」ので「家出少女みたいな子が来る」(p.44)、「図書館は朝から夜まで無料でいられるので、家出してきた中学生や高校生が居座っていることがたまにある」(p.211)、という箇所があり、実際に「図書館に中学生の女の子が家出してきた」で、「制服姿で、朝から夜までずっといる日がつづいた」。「たまに小説や雑誌を読んでいるが、閲覧席で寝ていることが多い。館長が声をかけても何も答えてくれなかった」(p.230)というストーリー展開になる。

児童の利用者に対しては、「週一回の読み聞かせ会

のほかに紙芝居や子供向け映画の上映会もやって」(p.12) いる。「午後になると二階にある児童館に来た子供達が三階の図書館にも来る」(p.84), 実際の利用者数は大人の方が多く、子供は監視が必要で、派遣の春香ちゃんは「春休みとゴールデンウィークは、図書館に仕事に来たのに、朝から夕方まで子供達と遊んでいる間に過ぎていった」が、「今日は久しぶりに静かな図書館に戻って、小学校が授業中の今の時間帯に、クレームおじいちゃんのような年金生活の老人が何時間も居座っているだけでヒマだ」(p.219) と感じている。

高齢の利用者の事例としては、「図書館の予約システム」のことで、怒っているおじいちゃんが出て、「パソコンができる若い奴だけが利用できればいいのか。年金生活の老人は図書館を使う権利はないのかと一方的に捲き立て」(p.217), 本田くんが対応すると、中学生の孫や、長男の嫁についてのぐちをきかされる、というシーンがある。

他には、日野さんの同級生の女性が、「図書館の本って汚いでしょ」(p.133) と発言している場面もある。

### 3-2-3. 図書館の職員

図書館の職員構成については、「ベテランの職員が多く」「司書は雇用自体が少なく、一人辞めないかぎりあったらいい人は雇わない。パートタイマーの非常勤ならば結婚して子供がいてもつづけられるので、辞める人は少ない」(p.11)。以前は「非常勤の人々を含め、全員が司書資格を持って」おり、「十年前は公立の図書館ではそれが当たり前」「分館とかではない限り、司書資格があることが採用の」条件だったことが紹介されている (p.12) が、この図書館は、このストーリーの時点でも派遣の春香ちゃん以外は、司書資格のある人々で構成された職員組織になっている。最近「パソコンができる人が求められるようになり、「パソコンができないと仕事にならない」ので、本田くんの「大学図書館で働いている友達は、新規職員の採用はなくなって、資格がない派遣社員が来るようになった」(p.13) と話していたことが紹介されている。

「ベテラン司書のじいさん達」(p.25)「人数も少ないし、一回りも二回りも年上の上司ばかり」(p.34)「ベテラン司書のじいさん達」(p.61)「年配の職員が圧倒的に多い市民センター」(p.87)「館長とベテラン司書の先輩達が将棋の話をしていた」(p.92)「館長と年配司書のおじ様達」はコーヒーを飲みに行き「非常

勤のおば様達はランチを食べに行った」。「若手司書の本田さんと日野さんに仕事を任せて、司書のおじ様達もおば様達もみんな好き勝手に過ごしている」(pp.218-219)「司書のおじ様達とおば様達」(p.274)などの表現が随所に見られる。「ベテラン」「年配」といっても、公務員の定年を考慮すると40～50代と思われるが、館長、司書職員、司書資格を持っている非常勤の女性職員、そして、若手の正規職員、司書資格を持っている、本田くんと日野さん、産休中の和泉さん、さらに、司書資格のない派遣の春香ちゃん、という職員が存在している。「ベテラン司書」「年配司書」、や、「非常勤のおば様」が、何人いるかはわからないが、一人ではなく、複数いることが確認できる。

館長は「図書館での存在感はあまりない」が、「本に詳しく、インターネットよりも正確に求めている本を探し出す。いざという時には頼りになる」「呼ばなくてもすぐに出てきてくれる」(p.232)ということで、一定の業務遂行能力のあるある人物として描かれている<sup>11)</sup>。

### 3-2-4. メインキャラクターの図書館職員

「四人が順番で語り手となり、図書館を中心にした日々が語られていく」というこの小説で、最初の語り手が本田くんである<sup>12)</sup>。

「三十一年と十ヵ月」「彼女がいたのは大学二年生の後半の半年だけ」(p.20) だという。現在も「用事がない休みの日はDVDか映画を見て本を読む」(p.45) という生活で、インコ(マメルリハ)を飼っている。

図書館の業務では、「利用者に怒られたり、子供達にからかわれたり、他の図書館から無理な相談をされたり、どうしたらいいのか分からなくなると」「思考停止して黙り込んでしまう」(p.13) ことがある。ストーリーの後半では、「図書館の予約システムのことで利用者のおじいちゃんに怒られ」(p.217) る場面で、冷静に対応していた。

女性の正規職員である日野さんは、二十代半ば、この図書館で「二年半」(p.85) 働いている。「初恋の相手はもーれつア太郎」「小学生になって好きになった相手は」「シャーロック・ホームズ」で、「中学一年の夏休みに太宰治に出会った」。「中学校の図書室」でも太宰の作品を読み、「今でも桜桃忌が近くなると」「お墓参りに行く」(pp.78-79) という<sup>13)</sup>。

現在も「仕事先でいくらでも本は読める」(p.80) が、給料のほとんどを本や漫画関連グッズについやしている。「中学生になると学校の図書室を利用するようになり、「子供の頃は毎週日曜日は朝から夕方まで

で図書館にい」て、「大人になったら、ここで働きたいと思っていた」(p.83)。

対人関係に関しては、「同級生の誰とも連絡は取っていない」「図書館でもあったことがない」(p.96)といい、「小学生のときも中学生のときも学校に友達がいなかった」「いじめられていた時もある。存在を忘れられていた時もある」「友達の遊ぶのが楽しいとは思えなかった」「家で一人で本を読んでいる方が楽しかった」「休み時間は図書室に行くか、教室にいても本を読んでいた」(pp.106-107)という。大学入学後、本屋でアルバイトをして、二年の夏休みにイギリスに留学し、ロンドンに滞在するが、軽いうつ病になりかける。「日本で友達ができなかったのに、異国の地で友達ができるはずがない」(p.117)と感じた。

児童館職員の松田くんには、「日野さんも友達は少ない。自分の意志や感情を言うのが苦手そうだった」(p.187)と思われている<sup>14)</sup>。派遣の春香ちゃんは、正規職員の本田くんと日野さんについて、「二人とも本が好きで、図書館に集まる子供達も好きで、望んでいた職業に就いたのが見ているだけでわかる」「彼らには彼らの世界があり、深く知識にあふれている」(p.220)と感じていた。

派遣職員の春香ちゃんは、「高校を卒業してから実家には帰っていない」(p.259)といい、人付き合いの点で、他のキャラクターと共通の要素がある。家族との関係でも、「高校を卒業してから実家には帰っていない」(p.259)という。

図書館では、派遣の職員として働いており、司書資格は持っていない。本田くんと同期の、正規職員の和泉さんが産休をとり、その代りに「一年契約」(p.167)でやってきた。「わたしは司書ではない。司書資格は持っていない派遣職員だ」。「他のパートタイムで働く非常勤司書のおば様達と共同で机を使っている」(p.219)という状況である。「図書館で働きはじめる前は、本なんて読んだことがな」(p.222)く、「短大を卒業して、派遣会社に登録」し、「半年とか一年契約」(p.236)で働いてきた<sup>15)</sup>。

春香ちゃんは、「パソコンでできる仕事だけやればいいと思い」「カウンター業務を中心としたパソコン業務という契約」(p.232)で図書館にきた。館長から、産休にはいっていた、正規職員の和泉さんが、あと一年休みたいといってきた、三年まで休めるから、「もう一年働いてくれない」「派遣で働きながら、通信とかで司書資格をとってみない」。「一年働いた後に短期の学校に通うという」こともできるから、「司書資

格を取って正規職員にならない」(p.234)と提案される。結局、春香ちゃんは「次は決まっていなくても、館長には、もう一年って言われたけど辞めます」(p.280)という決断をする。

春香ちゃんは「パソコンしかできることない」(p.236)と思っているが、司書資格を持っていてもパソコンが分からない人より、仕事を教えるのは楽と、本田くんは感じている。年齢のこともあり、「館長もパソコンのことはよく分かっていない」(p.28)という。

館長から、司書の資格を取って、正規職員にならないかと誘いを受けるが「もう一年働いて司書の資格を取るなんて、わたしには無理だ」(p.240)と感じている。

### 3-3. 『海に見える街』の設定と現実の図書館状況

登場人物が「友達が少ない」という設定で、これは、畑野智美のほかの作品と共通する要素でもあるが、『海に見える街』登場人物である、本田くんや日野さんは、コミュニケーションスキルにやや難のあるキャラクターでも、本が好き、読書量が多い、といった人物であれば、正規職員として勤務可能な勤め先として、図書館が選ばれている、ということになる。本田くんは、利用者との対応がうまくいかないとかたまってしまふ、という状況から、後半では、クレームをつけてきた高齢の利用者に冷静に対応している。日野さんや、産休で休んでいる和泉さんは、利用者に対しては、普通に対応しているように見える。

『海に見える街』の作者、畑野智美は、いくつかの職場で、バイトをする生活をつづけてきたが、「図書館で働いた経験はない」といっており、図書館を外部からみて、ストーリーを構想していると思われる。

『海に見える街』は、図書館の業務内容や、派遣職員と正規職員、高齢の職員と若手職員との年齢的な断絶の存在、コンピュータ操作に関する職員のスキル、などについて、ふれている。ただ、「市内には図書館が分館をいれて七館」(p.10)ある、という設定でも、正規の公務員が同一の職場に長期間勤務していたり、非正規雇用の職員に、司書資格を取って職員にならないか、と館長が薦めているストーリーは、最終的に、派遣の春香ちゃんは「わたしには無理だ」と感じて、そういう道は選択されなかったが、現実には、より厳しい雇用状況となっている実態がある。

商社の面接担当官の発言として、「女とゾウキンは

使い捨て」というフレーズが雑誌に掲載されてから、30年以上が経過した<sup>16)</sup>。この間、「男女雇用機会均等法」が施行され、一定の社会的制度として定着したかに思えるが、一方、出産を機に7割の女性が無業になっているという指摘もなされている<sup>17)</sup>。

そうした中で、図書館は、非正規公務員の多い職場の実例として、取り上げられることが現実にある<sup>18)</sup>。今年（2013年）6月には、「図書館おねえさんは使い捨て」というショッキングなタイトルの記事が、週刊誌に掲載された<sup>19)</sup>。「図書館を題材にした本が売れ、映画が封切られるなど、ちょっとした図書館ブームが起きて」いるが、「公立図書館の司書らを含む非正規公務員70万人が直面する『ワーキングプア』の現実」がある<sup>20)</sup>。「東京都内の公立図書館で働く女性司書」は「約10年前、1年契約の非常勤職員として採用され、更新を繰り返してきたものの、月給は約20万円。税金などを除くと手元には15万円ほどしか残らない」という。「正規職員との待遇格差」は「年収ベースでほぼ3倍の開き」がある一方、「『むしろ図書館以外への異動がある正規の人たちより、ある面では業務に詳しくなりつつある』」とするこの記事は、図書館界でも注目をあつめた。図書館に関する現実の報道では、先に紹介した『読売新聞』（大阪本社版）のように、公共図書館運営の外部委託について、肯定的な報道もなされているが、その問題性も指摘されている<sup>21)</sup>。

#### 4. 図書館の現況とフィクションの中の図書館

「はじめに」でとりあげた、『図書館戦争』実写版は、フィクション性の強い作品ではあるが、その公開により、図書館や図書館に関係する資格に対する関心を持つきっかけになったという層も存在していると思われる。実在の図書館でロケが行われ、そのロケ地となった図書館での公開に合わせたイベント開催など、実際の業務とのコラボレーションにより、「場」としての図書館が目される一つの契機となった。

図書館スペースの活用について、近年、大学図書館は、教育の方法に「アクティブラーニング」をとり入れるという方向性が示されていることもあり、図書館の多様なスペース構成が、受験生へのアピールポイントの一つであり、進学先選択の判断材料になっていることが、テレビ番組で紹介された。そこでは、学生への快適空間の提供や、24時間開館などが話題となっていた<sup>1)</sup>。

一方、記録の媒体について、全体的に電子化が進行

する中で、図書館に対するイメージも多様なものになっている。もとより、フィクションの作品は、図書館のイメージアップや図書館実態の正しい周知のために書かれるものではないが、作品に描かれる図書館は、その制作者のもっている図書館観に影響される。

今年（2013年）度の「江戸川乱歩賞」は、竹吉優輔『襲名犯』が受賞した<sup>2)</sup>。作者は、図書館に勤務している人物で、単行本の巻頭に、写真が掲載されているが、書物を手にたたずむ著者の背景に映っている書架には、背の下部にラベルが貼られている図書が確認でき、図書館で撮影されたと思われる。また、茨城県地域情報紙『常陽リビング』には、竹吉優輔のインタビューが掲載されているが、その記事の写真には「竹吉司書のオススメ本」という表示のある書架の前で、図書を手にたたずむ著者の姿が映っており、「勤務する牛久市立中央図書館には竹吉さんのおすすめ本特設コーナーがある」と記されている<sup>3)</sup>。現在も図書館に勤務している人物が、図書館の実態に関する豊富な知識や実体験を背景に、図書館を舞台として設定した作品として、注目される。また、『サエズリ図書館のワルツさん』の著者、紅玉いづきは、著作の「あとがき」において、「私が図書館に勤務していたのは、しばらく前の事です<sup>4)</sup>」「私が図書館に勤めていた頃、破れた絵本が返却されたことがありました<sup>5)</sup>」など、図書館勤務の経験があることを明かしている。

かつての図書館イメージへの「郷愁」を感じながらも、電子メディアへの移行について「余禄」『毎日新聞』では、ベギー葉山『学生時代』の図書館を紹介し、「図書館には時間が止まったような空気が漂っている」「そんな雰囲気をかもしだしているのは書架に並んだ大きな百科事典の背表紙だろう」とする一方で、電子化された辞書の利点をあげつつも、最後は「軽い電子辞書は片手を伸ばすだけでいい。まさに手軽だ。それだからこそ、ずっしり重たい百科事典はいつまでも図書館に並んでほしい」と結んでいる<sup>6)</sup>。

フィクションの中で描かれる図書館のイメージも、図書館の実情の変化に合わせて、かわっていくことが考えられ、その動向を注視しながら検討の対象としていきたい<sup>7)</sup>。

#### 注

1. はじめに

1) 映画『図書館戦争』公式サイト「イントロダクション」では、『ダ・ヴィンチ』読者投票によるキャスト第1位となったのが、今回のメインキャスト2人（榮倉奈々・岡田准一）であったことが、紹介され

ている。

(<http://www.toshokan-sensou-movie.com/aboutthemovie/index.html>)

2) 「映画『図書館戦争』をより楽しむための用語集」

(<http://www.toshokan-sensou-movie.com/keyword/index.html>)

映画『図書館戦争』の冒頭で、紹介される「図書館の自由に関する宣言」は、その条文が、「第4 図書館はすべての不当な検閲に反対する」と表示されている。実際の「宣言」は、その解説書である『図書館の自由に関する宣言 1979年改訂』にあるように、「第4 図書館はすべての検閲に反対する」となっている。

原作である、小説『図書館戦争』は、目次が『図書館の自由に関する宣言』をなぞったもので、「4 図書館はすべての不当な検閲に反対する」(p.3)と表示されている。また、次のページ(p.5)に掲載されている「宣言」の主文も、同じ表現(「すべての不当な検閲に反対する」)である。この件について、作者の有川浩は、同書の「あとがき」において、「思いつきのきっかけは近所の図書館に掲げてあった『図書館の自由に関する宣言』のプレートです」「万が一本書を読んで図書館事情に興味を持たれた方がおられましたら、何とぞご自分で調べていただけますよう。こんな話ですからかなり現実の図書館事情とは違えてあります」(p.344)と述べている。

有川浩『図書館戦争』メディアワークス、2006

『図書館戦争』公式サイト「ABOUT THE MOVIE」の冒頭では、「図書館の自由に関する宣言」が表示されるが、こちらでは、「図書館はすべての検閲に反対する」という部分を含む「宣言」の主文が提示され、「1954年に採択された日本図書館協会による綱領。この宣言は実際に存在しているもので、原作者の有川浩はこの宣言を図書館で見て、そこから『図書館戦争』の物語が生まれました」と記されている。

(<http://www.toshokan-sensou-movie.com/aboutthemovie/index.html>)

DVD『図書館戦争 PREMIUM BOX』の付属資料で、公式サイトを編集した内容となっているブックレットでは、冒頭のページに『図書館の自由に関する宣言』が掲載されており、こちらも「図書館はすべての検閲に反対する」と表示されている。

下記に示した、日本図書館協会から刊行されている「宣言」の解説書では、「1979年改訂において、54年宣言の主文から『不当な』という表現を削除し、憲法第21条2項の検閲禁止の規定と合致させた」(p.33)としている。

日本図書館協会『図書館の自由に関する調査委員会編『図書館の自由に関する宣言 1979年改訂 解説』1987

3) たとえば、同じフィクションの作品でも、コミック『図書館の主』には、巻末に用語解説のページである「『図書館の主』用語集 図書館通信」が掲載されており、現実に存在する、文芸関係、児童文学関係、図書館関係の用語で、ストーリーに関連する用語をとりあげて解説している。

篠原ウミハル『図書館の主1』芳文社、2011、pp.190-191

篠原ウミハル『図書館の主2』芳文社、2012、pp.190-191

篠原ウミハル『図書館の主3』芳文社、2012、pp.190-191

篠原ウミハル『図書館の主4』芳文社、2012、pp.190-191

これらのうち『図書館の主2』pp.191には、「取材協力 千代田区立千代田図書館 国立国会図書館国際子ども図書館」との記述がある。

また、コミック『夜明けの図書館』では、ストーリーを作る際に、現実の図書館を取材した経緯について、作者の実体験を踏まえた、エッセイマンガが掲載されている。

桒納タオ「レファレンスマンガへの道」『夜明けの図書館』双葉社、2011、p.48

桒納タオ「単行本への道」『夜明けの図書館』双葉社、2011、p.136

桒納タオ「あとがきマンガ ある日、図書館で」『夜明けの図書館2』双葉社、2013、pp.178-179

4) 須藤遥子『自衛隊協力映画』では、自衛隊が撮影等に協力している映画について、「本年二〇一三年は、『自衛隊協力映画』の当たり年である」としており、同書の「はじめに」では、『図書館戦争』実写版について、「六月四日の時点での興行収入は、一五億四八〇〇万円と健闘を見せた」と紹介されている。また、「自衛隊協力映画はあくまで一般劇映画であり、観客が主体的に映画館に赴き、自分で料金を払って楽しむ娯楽商品である」「そして、そこにこそ本書で問題にする政治性(ポリティクス)が存在する」との指摘がなされている。出典は、以下の通り。

須藤遥子『自衛隊協力映画『今日もわれに大空あり』から『名探偵コナン』まで』大月書店、2013、pp.7-16

5) 映画『図書館戦争』公式サイト「プロダクションノート4」では、撮影に使用された図書館として、現・山梨県立図書館、旧・山梨県立図書館、水戸市立西部図書館、十日町情報館、北九州市立中央図書館、があげられている。

(<http://www.toshokan-sensou-movie.com/sp/about/productionnote04.html>)

6) 山梨県立図書館「ミニ展示『図書館戦争』のロケ地から」

(<http://www.lib.pref.yamanashi.jp/oshirase/2013/04/post-20.html>)

「映画『図書館戦争』公開記念イベント in 十日町情報館」

(<http://www.tokamachishikankou.jp/modules/gnavi/index.php?lid=824>)

その後、2013年11月の「ブルーレイ&DVD『図書館戦争』」の発売にむけて、北九州市立中央図書館で、11.1(金)~11.30(土)の期間中、「展示企画『図書館戦争の世界』」として、ブルーレイ&DVDのポスターや「図書館隊員の衣装、小道具」などの展示を行うこと



が、『図書館戦争』公式サイトで、告知された。

(<http://www.toshokan-sensou-movie.com/news/index.html>)

- 7) 「図書館変身中 民間委託でサービス拡大 午後9時まで 本を消毒『ソムリエ』派遣『読売新聞』(大阪本社版), 2013. 4. 30, p.27

ほかに、この記事で紹介されているのは、大阪府の寝屋川市立図書館が、「午後9時まで開館」し、「ブックシャワー」という「風でほこりを吹き飛ばし、紫外線で殺菌。ほのかなアロマの香りもつく」サービスを行っていることや、高松市の市立図書館で、インターネット予約により、「市内のホテルとクリーニング店計3か所で貸し出しと返却ができるサービスを始め」それに加えて「本のソムリエ派遣事業も実施し、司書が市内各地へ出向いて本の選び方や地元が舞台の小説などを紹介」していること、などである。

## 2. テレビドラマ『ビブリア古書堂の事件手帖』

- 1) 『ビブリア古書堂の事件手帖』は、月曜 21:00～、フジテレビ系列で、11回にわたって放映された。

原作となった作品は、以下の通り。

三上延『ビブリア古書堂の事件手帖 葉子さんと奇妙な客人たち』アスキー・メディアワークス(メディアワークス文庫), 2011

三上延『ビブリア古書堂の事件手帖2 葉子さんと謎めく日常』アスキー・メディアワークス(メディアワークス文庫), 2011

三上延『ビブリア古書堂の事件手帖3 葉子さんと消えない絆』アスキー・メディアワークス(メディアワークス文庫), 2012

三上延『ビブリア古書堂の事件手帖4 葉子さんと二つの顔』アスキー・メディアワークス(メディアワークス文庫), 2013

4の帯には、「TVドラマ フジテレビ系列にて 毎週月曜よる9時 絶賛放映中!」「年間ベストセラー文庫総合1位(2012年/トーハン調べ)日本で一番愛された文庫ミステリ, 最新刊」と記されている。

脚本は、相沢友子。第5回の視聴率は11.5%(ビデオリサーチ・関東)。

- 2) フジテレビのホームページでは、「2013年2月11日放送 今回は、結末が2つです」の内容として、「書籍を寄贈するため聖桜女学館を訪ねた」が「書籍は、教員の杉浦」「により選別され数冊が『中学生には不適切』という理由で返却されてしま」い、「文学的評価が高く、性描写や暴力描写があるだけで除外するのはもったいないと言うが」、教員は「最近もアントニー・バージェスの『時計じかけのオレンジ』を読んで学校を批判する感想文を提出した生徒がいたと話す」と紹介されている。

(<http://fod.fujitv.co.jp/s/genre/drama/ser4440/>)

- 3) 図書委員役は、生田絵梨花(「AKBの公式ライバル」と称されるアイドルグループ「乃木坂46」の選抜メンバー)が演じた。

- 4) アントニー・バージェス, 乾信一郎訳『時計じかけ

のオレンジ』早川書房(ハヤカワ文庫NV), 1981

マルキ・ド・サド, 渋沢竜彦訳『美徳の不幸』河出書房新社(文庫), 1992

ローリー・ムーア, 小梨直訳『愛の生活』白水社, 1991

レオポルド・フォン・ザッヘル・マゾッホ, 種村季弘訳『密使 他(マゾッホ選集4)』桃源社, 1977

J・ホークス, 吉田誠一訳・関桂子訳『もうひとつの肌』国書刊行会, 1983

刊行年から、時間が経過しているものが多く、中学生には、手に取られにくいとも考えられる。

ちなみに、寄贈を受け入れた図書で、画面で書名を確認できるものは、『沈黙のアイドル』、『黄金のロザリオ』、『遠まわりする雛』、『ほうき星 上』、『地球を斬る』、などである。先に示した、寄贈を断られた資料に比べると、少なくとも、刊行年の新しいものである。

赤川次郎『沈黙のアイドル』角川書店, 2008

鈴木由紀子『黄金のロザリオ』幻冬舎, 2009

米澤徳信『遠まわりする雛』角川書店, 2008

山本一力『ほうき星 上』角川書店, 2008

佐藤優『地球を斬る』角川学芸出版, 2007

三上延『ビブリア古書堂の事件手帖2 葉子さんと謎めく日常』アスキー・メディアワークス(メディアワークス文庫), 2011, p.258, に掲載されている「参考文献」には、下記の3種の『時計じかけのオレンジ』が、あげられている。

アントニー・バージェス, 乾信一郎訳『時計じかけのオレンジ アントニー・バージェス選集2』早川書房, 1980

アントニー・バージェス, 乾信一郎訳『時計じかけのオレンジ』早川書房(ハヤカワ文庫NV), 1981

アントニー・バージェス, 乾信一郎訳『時計じかけのオレンジ 完全版』早川書房(ハヤカワ epi 文庫), 2008

ドラマの冒頭で表紙がうつっているのは、「ハヤカワ文庫NV」のもの。

- 5) 全国学校図書館協議会(全国SLA)は、2013年9月2日に「『はだしのゲン』の利用制限等に対する声明」を発表した。そこでは、「この件に関し、教育委員会が各学校の選定した図書を各校の司書教諭・学校司書などの意見を聞くことなく閉架措置を求めたこと、児童生徒の情報へのアクセス権を考慮しなかったこと、学校図書館の有する機能及び専門性に対する理解が欠如していたことなどに問題があり、深く憂慮するものです」とされている。

また、国立国会図書館が発表している『カレントアウェアネス-E』では、以下のように報じられた。

「漫画『はだしのゲン』について、松江市教育委員会が2012年12月に松江市内の市立小中学校に対して閉架措置及び貸出閲覧制限を求めていたことが、2013年8月に報じられた。この件は、その後新聞、テレビ等のマスメディアも大きく取り上げ、表現の自由、知る権利の保障、表現が子どもの教育に与える影響、歴史認識、図書館の在るべき姿や役割などをめぐって、各所で様々な議論を喚起するに至った」

「『はだしのゲン』閲覧制限に関する図書館関係団体

等の動き』『カレントアウェアネス-E』No.244, 2013, 9, 12

(<http://current.ndl.go.jp/e1472>)

また、日本図書館協会 図書館の自由委員会のニュースレター『図書館の自由』では、この件に関する経緯をまとめ、関連文献のリストを掲載している。

『『はだしのゲン』の利用制限について』『図書館の自由』no.81, 2013, 9, pp 1-15

6) 学校図書館の現場関係者からは、以下のような見解が表明されている。

「今年 8 月、突然マスコミ報道がされ、多くの議論が巻き起こった結果、『ゲン』は書架に戻った」「その間の焦点は、『ゲン』の描写や『ゲン』の歴史観であり、それを子どもに読ませてもいいのかという議論であった。そこには、学校図書館にある本は、『読むべき』ものだから、学校図書館にふさわしくないもの=『読むべき』でないものは置いてはならない、という考えが、賛成反対のどちらの側にもあったように思う。しかし、『子どもたちのためになる』というのは、そういうことだろうか。

出典は、以下の通り。

飯田寿美『『はだしのゲン』でなかったら』『図書館雑誌』2013.11, Vol.107, No.11, p.672

飯田寿美は、小林聖心女子学院・司書教諭、学校図書館問題研究会・代表。

また、長岡義幸は、事件の事実関係確認のために松江市教育委員会を取材し、松江市の小中学校 49 校の校長に実施したアンケートの結果をとりあげ、その一部を紹介する中で、「図書館の機能に自覚的な校長もあまり見受けられなかった。だが、これが学校図書館の拠って立つ現実なのだろう」と指摘している。

長岡義幸『『はだしのゲン』の“閲覧制限”問題をめぐって 出版産業時評 25』『みんなの図書館』no.439, 2013.11, pp.53-59

一方、たとえば、『正論』2013 年 11 月号には、「総力特集『はだしのゲン』許すまじ!』が掲載された。掲載された記事は、

『正論』編集部「問題シーンを一挙公開 これでも子供たちに読ませますか」pp.54-61

井沢満(脚本家・作家)「愛なき史観は国を滅ぼす」pp.62-71

三品純(ジャーナリスト)「松江市教委はなぜ迷走したのか そして子供たちが犠牲になる」pp.72-76

中宮拝(サヨクウオッチャー)「気は確かか? 擁護派のトンデモ発言」pp.77-81

潮匡人(評論家)「歪んだ賛美キャンペーンに朝日新聞の本性を見た!」pp.82-87

佐波陽子(ジャーナリスト)「『ゲン』だけではない学校図書室にのさばる反日図書」pp.88-95

出典は、以下の通り。

「総力特集『はだしのゲン』許すまじ!』『正論』2013.11, pp 54-95

長岡義幸は、この『正論』の特集について、個別の記事の問題点を指摘し、「学校図書館の在り方に疑義が

あるのなら、いまある図書を排斥するのではなく、多様な主張、見方を提示すればよい」「こういう言いがかりを“為にする議論”というのではないか」と批判している。

長岡義幸『『はだしのゲン』を批判する者らのデタラメさ加減を問う 出版産業時評 26』『みんなの図書館』no.440, 2013.12, pp.70-76

7) 松江市は、学校司書を公立小中学校全校に配置し、学校図書館支援センターも設置して学校図書館活動の支援を実践している。

一方、松江市がある島根県の学校図書館担当者配置について、「学校司書の雇用形態は」「ボランティアや短時間勤務が大半で」「現状では図書館運営の権限が十分に与えられていない」ので、「職員室にも机がなく、職員会議にも出ておらず、一人職場であることが多い。校長からの閲覧制限指示に対し、現場の学校司書はだれにも相談できず従わざるを得なかったと思われる」との指摘がある。

出典は、以下の通り。

谷嶋正彦『『はだしのゲン』閲覧制限問題 座標 January 2014』『図書館界』vol.65, no.5, 2014.1, p.291

谷嶋正彦は、大阪信愛女学院図書館、日本図書館研究会・理事。

また、松江市と合併した東出雲町は、合併前に、学校図書館を活用した教育実践を展開していることで知られており、下記のような著作も発表されていた。

原田由紀子『東出雲発! 学校図書館改革の軌跡 身近な図書館から図書館活用教育へ』国土社, 2012

### 3. 畑野智美『海の見える街』

#### 3-1. 畑野智美と『海の見える街』をめぐる言説

1) 現時点(2013 年 11 月)での刊行作品は、以下の通り。

畑野智美『国道沿いのファミレス』集英社(文庫)2013 ←集英社, 2011

畑野智美『夏のバスプール』集英社, 2012

畑野智美『海の見える街』講談社, 2012

畑野智美『南部芸能事務所』講談社, 2013

なお、「第 34 回吉川英治文学新人賞」を受賞した作品は、以下の通り。

伊東潤『国を蹴った男』講談社, 2012

月村了衛『機龍警察 暗黒市場』早川書房, 2012

畑野智美は、出身校である「桐光学園」が刊行している雑誌に登場し、インタビューにこたえて、「芸術」の分野で活躍している先輩として、「きっかけは国語の授業で紹介された一冊の小説。『あきらめ悪く』頑張り続けて、夢を実現しました」と述べている。

出典は、以下の通り。

『TOKO JOURNAL 桐光ジャーナル』vol.13, no.2, 2011. autumn, p.2

また、『WEB 本の雑誌』で発表されているインタビューの中では、「卒業後は演技の教室みたいところで通い」「結局 1 年弱で辞め」「そこからずっとバイト生活」で、「漫画喫茶」「新聞社」「マッサージ屋の受付」

「出版社」などで、働いた経験が語られている。

「作家の読書道 第138回 畑野智美さん」「その3 暗黒(?)の10年間」『WEB本の雑誌』『WEB本の雑誌』

([http://www.webdoku.jp/sakka/michi138\\_hatano/20130619\\_3.html](http://www.webdoku.jp/sakka/michi138_hatano/20130619_3.html))

2) 吉田伸子「早く読まなきゃ! ①一作ごとに進化する畑野智美, 今がチャンス!」『IN-POCKET』2012. 12, pp.64-75

3) 伊藤整『若い詩人の肖像・火の鳥 新潮現代文学13』新潮社, 1981

小説の中で、小樽高商(現・小樽商科大学)の図書館が登場する部分には、以下のような記述がある。

入学後「放課後や、休講の時間には」「建物の端にある静かな図書館へと通うようになり、「その図書館で私はまた、ほとんど常に、広い閲覧室のどこかに、あの蒼白い小林がいるのを発見した」。「小説集を借り出して読んだ」が「それ等の本のどれもが、私が借りる前に、あの顔の蒼白い小林多喜二に読まれていることを、自然に意識した」。(pp.18-19)

なお、上記書籍には、曾根博義による解説(pp.371-377)が掲載されている。それによれば、「著者の青年時代を客観的に描いた自伝的小説」とされる『若い詩人の肖像』の最初に発表された部分のタイトルが『海の見える町』で、これは「小樽高商に入学してから上京するまでの約六年間の、詩と恋愛を中心にした著者の青春体験」(p.372)を描いた作品であるとされ、この小説では「海の見える町」とは、「小樽」のことである。

『若い詩人の肖像』は「各誌に発表されはじめた短篇をもとに成った長篇で、三十一年八月に新潮社から刊行された」「著者の青年時代を客観的に描いた自伝的小説」であり、「小樽高商に入学してから上京するまでの約六年間の、詩と恋愛を中心にした著者の青春体験が、北海道の風土や時代環境や詩壇とのかかわりの中で、ほぼ事実即して、かなり大胆に語られている。広い意味での教養小説の一種と言えようが」「逆に、実業の府、小樽高商から中学校の職場を経て詩人になるまでの過程を描いた、芸術家としての自立の物語になっている」(pp.372-373)と紹介されている。

また、上記書籍には、編集部作成の伊藤整の年譜が附されている(pp.378-382)が、この小説に関する部分は、以下の通り。

大正十一年(一九二二)十七歳 四月 小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)に入学。一学年上級に小林多喜二がいた。詩作に専念しはじめる。

大正十四年(一九二五)二十歳 三月 小樽高商を卒業。

昭和二十九年(一九五四)四十九歳 三月「海の見える町」を《新潮》に発表。七月『海の見える町』を新潮社より刊行。

昭和三十一年(一九五六)五十一歳 八月『若い詩人の肖像』を新潮社より刊行。

また、『海の見える町』には、鉄道で通学するシーン

が登場することから、最近でも鉄道専門雑誌の記事の中に、以下のような指摘があった。

『海の見える町』は、「伊藤整の自伝的小説」で、「多彩な群像が登場、その交流や関わり、伊藤整自身の詩作に寄せる情熱が描かれ」ており、「通学列車に乗り合わせる女学生たちとの接触が点景として添えられ」「芽生えた恋の様子が熱っぽく」描写される。

出典は、以下の通り。

原口隆行「文学の中の鉄道 伊藤整『海の見える町』『雪の来るとき』」『鉄道ジャーナル』2011. 3, No.533, p.5

4) 吉田伸子「早く読まなきゃ! ①一作ごとに進化する畑野智美, 今がチャンス!」『IN-POCKET』2012. 12, pp.64-75

5) 「著者に聞きたい 畑野智美さん『海の見える街』」『MSN産経ニュース』2, 013. 1. 20

(<http://sankei.jp.com/life/news/130120/bks1301200841011-n1.hym>)

(<http://sankei.jp.com/life/news/130120/bks1301200841011-n2.hym>)

6) 吉田大助「あらゆる恋は奇跡だ。——この年の瀬に、『今年最高の恋愛小説』が登場した!」

「Book 今週のイチ押し! 『海の見える街』」『週刊SPA』2012. 12. 25, p.114

7) 北上次郎(文芸評論家)「『海の見える街』男女4人の不器用な日々 目利きを選ぶ今週の3冊」『日本経済新聞』2012. 12. 19(夕刊), p.11

8) 北上次郎「新刊めったくたガイド 畑野智美『海の見える街』に引き込まれる!」『本の雑誌』2013. 1, 通巻355号, pp.46-47

9) 「作家の読書道 第138回 畑野智美さん」『WEB本の雑誌』

「その1 漫画やアニメが好きだった」

([http://www.webdoku.jp/sakka/michi138\\_hatano/index.html](http://www.webdoku.jp/sakka/michi138_hatano/index.html))

「その2 高校の授業で運命の出会い」

([http://www.webdoku.jp/sakka/michi138\\_hatano/20130619\\_2.html](http://www.webdoku.jp/sakka/michi138_hatano/20130619_2.html))

「その3 暗黒(?)の10年」

([http://www.webdoku.jp/sakka/michi138\\_hatano/20130619\\_3.html](http://www.webdoku.jp/sakka/michi138_hatano/20130619_3.html))

「その4 応募生活を支えた座右の銘」

([http://www.webdoku.jp/sakka/michi138\\_hatano/20130619\\_4.html](http://www.webdoku.jp/sakka/michi138_hatano/20130619_4.html))

「その5 デビュー後の生活」

([http://www.webdoku.jp/sakka/michi138\\_hatano/20130619\\_5.html](http://www.webdoku.jp/sakka/michi138_hatano/20130619_5.html))

「その6 ご自身の作品について」

([http://www.webdoku.jp/sakka/michi138\\_hatano/20130619\\_6.html](http://www.webdoku.jp/sakka/michi138_hatano/20130619_6.html))

読書遍歴を語る中で、最初に書名があがっているのは、子どもの頃の『かぎばあさん』のシリーズ、『こちらマガーク探偵団』シリーズ、などである。「中高一貫の学校に行」き、「現代国語の」「先生が薦めてくれた本はよく読み」、「授業中に、村山由佳さんの『天使の

卵』(小説すばる新人賞受賞作品。のちに畑野智美も同賞を受賞している)を薦めてくれ「村山さんの本を図書館で借りて読んで」「すごよかったと司書の先生に言ったら、江國香織さんの『きらきらひかる』を薦められて、これもものすごく衝撃を受け」「それから司書の人に教えてもらってよしもとばななさんを読んだり、よく図書館に来る男の子が筒井康隆が面白いと言われて読んだり…。思春期的な衝動に小説がばしっと合ったんでしょうね」と述べている。

「指定校推薦で(東京女学館)短大に」に進学し、「わりとお嬢さんばかりのところ」で、「学校の図書室の2階の隅の誰も使わない自習室で1人でずーっと本を」読んでいた。1年からゼミに参加し、西洋哲学史で、2年では、デカルト『方法序説』を扱ったという。先生は、高野亘(群像新人賞を受賞した人物)であり、「短大の頃は学校に行き先生に絡んでバイトして本を読んで、という毎日でした」。「太宰の『人間失格』の面白さもわかるようになり」「そこから図書館で哲学の本や志賀直哉や島崎藤村を読んでいました」という。

自らの図書館との出会いや読書遍歴について「小さい頃に家の近くに図書館ができ」「中高の頃の現国の先生と短大の哲学の先生との出会いも、恵まれていました」と語っている。大学卒業後は、「バイト生活」をしていたが、その間にも、読書は続けており、その一方で、短大時代から、創作に着手し、文学新人賞にも応募するようになって、「小説すばる文学新人賞」の受賞に至っている。

10) 世田谷区は、東京 23 区の中で、最大の人口を有している。『日本の図書館』のデータでは、世田谷区立図書館の専任職員数は、192 人(うち司書 44 人)で、23 区の中でも突出して多い。世田谷区次に専任職員が多いのは、杉並区の 75 人(うち司書 43 人)で、司書の比率は、杉並区の方が世田谷区より高い。東京 23 区で世田谷区に続く人口を有する特別区と、政令指定都市で世田谷区と同程度の人口を有する都市について、人口、図書館数、専任職員数(うち司書の数)を、以下に示す。

|             | 人口    | 図書館数 | 専任職員 | うち司書 |
|-------------|-------|------|------|------|
| 世田谷         | 837 千 | 16   | 192  | (44) |
| = 東京 23 区 = |       |      |      |      |
| 練馬          | 695 千 | 12   | 66   | (11) |
| 太田          | 676 千 | 16   | 14   | (05) |
| 江戸川         | 665 千 | 12   | 42   | (09) |
| 足立          | 645 千 | 16   | 18   | (04) |
| 杉並          | 528 千 | 13   | 75   | (43) |
| = 政令指定都市 =  |       |      |      |      |
| 堺           | 838 千 | 14   | 75   | (60) |
| 新潟          | 803 千 | 19   | 66   | (54) |
| 浜松          | 792 千 | 22   | 82   | (31) |

\* 専任職員数には、江戸川区 3 名、新潟市 1 名、浜松市 16 名、の兼務者を含む。うち司書数には、浜松市 1 名の兼務者を含む。

世田谷区立図書館では、中央図書館(4,134 m<sup>2</sup>)=専任職員数 50 名(うち司書 8 名)と、やや規模の大き

い、砧図書館(2,242 m<sup>2</sup>)=専任職員数 12 名(うち司書 2 名)、梅ヶ丘図書館(1,599 m<sup>2</sup>)=専任職員数 12 名(うち司書 3 名)、小規模の代田図書館(130 m<sup>2</sup>)=専任職員数 6 名、を除いた他の館(12 館)は、延べ床面積 500~1,000 m<sup>2</sup>、の施設に、専任職員数 8~12 名、が配置されている。

出典は、以下の通り。

『日本の図書館 統計と名簿 2012』日本図書館協会, 2013, pp.186-189, pp.206-211

### 3-2. 『海に見える街』の図書館

#### 3-2-1. 図書館の施設と業務内容

#### 3-2-2. 図書館の利用者

#### 3-2-3. 図書館の職員

11) たとえば、コミック『図書館の主 1』では、「市役所から新しい館長で来た人物が、「私はあんまり利用したことがなくて」「陰気な感じ」「左遷みたいなものか」「図書館なんて本さえあればいいだろう」などと、職員の前で発言し、「館長になる人がそんな態度でどうするんですか」「本を探して欲しいって人にどう対応するんだよ」「読みたい本を探してくるのが司書だろう」とたしなめられており、存在感が希薄な事例と言えよう。

篠原ウミハル『図書館の主 1』芳文社, 2011, pp.73-77

#### 3-2-4. メインキャラクターの図書館職員

12) 北上次郎「新刊めったくたガイド 畑野智美『海に見える街』に引き込まれる!」『本の雑誌』2013. 1, 通巻 355 号, pp.46-47

13) 作者の畑野智美は、インタビューで、短大時代に「太宰の『人間失格』の面白さもわかるようになっ」と話している。

出典は、以下の通り。

「作家の読書道 第 138 回 畑野智美さん」「その 3 暗黒(?)の 10 年間」『WEB 本の雑誌』

([http://www.webdoku.jp/sakka/michi138\\_hatano/20130619\\_3.html](http://www.webdoku.jp/sakka/michi138_hatano/20130619_3.html))

14) 先に示したように、北上次郎は、『海に見える街』の書評で、登場人物の共通項は「友達がない」「あるいは極端に少ない」ことで、「畑野智美が書き続けているのは、友達のいない人間たちの物語」である、と述べている。

15) こうした経歴は、文学や創作への興味・関心を別にすれば、インタビューで語られた、畑野智美自身の短大卒業後の経歴とかさなる部分がある。

### 3-3. 『海に見える街』の設定と現実の図書館状況

16) 「有名商社」の「面接担当者が露骨にこう言ったというのである。『女とゾウキンは使い捨て。結婚しても働こうなどという人は当社には向かない』という。

出典は、以下の通り。

井ノ部美千代(「私たちの男女雇用平等法をつくる会」会長)「なんで女にゃ職がない いま“厳冬期”の女子学生就職事情」『月刊 教育の森』vol.6, no 8, 1981, p.115

17) 小林美希「なぜ、親になれないのか」『ルポ 生まれ

- ない社会』河出書房新社，2013. 6, pp.12-30
- 18) 上林陽治『非正規公務員という問題 問われる公共サービスの在り方 地方公務員のうち、いまや三分の一以上が非正規労働者』(岩波ブックレット No.869), 岩波書店, 2013. 5
- 19) 「図書館おねえさんは使い捨て 非正規公務員 70万人『ワーキングプア』の現場」『サンデー毎日』2013. 6. 30, pp.166-167
- 20) 「図書館を題材にした本が売れ」という部分について、固有名詞はあげられていないが、たとえば、宮田昇『図書館に通う』は、各紙誌の書評で取り上げられた。
- 宮田昇『図書館に通う』みすず書房, 2013
- 『図書館に通う』をとりあげている書評で、同書が扱っている公立の図書館で購読しているケースの多い新聞・雑誌に掲載されたものは以下の通り。なお、書評の執筆者については、各媒体の表記をそのまま示した(宮田昇『図書館に通う』の表示は省略)。
- 「知られざる読書文化の現在に迫る 今週の本棚」井波律子・評、『毎日新聞』2013. 6. 16, p.7
- 「利用者の視点で体験つづる 著者に会いたい」文：野口健祐、『朝日新聞』2013. 6. 30, p.15
- 「借りて読む楽しみに誘う」評者：小田光雄(文芸評論家)、『東京新聞』2013. 6. 30, p.9
- この記事は、同一の内容で、『中日新聞』2013. 6. 30, p.13, にも掲載された。
- 「著者は語る 14 文藝春秋 BOOK 倶楽部」文：佐久間文子,(月刊)『文藝春秋』2013. 7, p.414
- この著作については、下記で扱っている。
- 佐藤毅彦「『図書館に通う』(宮田昇)では、図書館はどのように言及されているか」『甲南国文』, vol.60, 2013, pp.21-33
- 上記は、みすず書房のPR誌『みすず』に連載時の原稿を扱った内容のもの。その後、2013年5月に刊行された、単行本『図書館に通う』みすず書房, については下記を予定している。
- 佐藤毅彦「『図書館に通う』(宮田昇)では図書館はどのように言及されているか・続」『甲南国文』2014(予定)
- なお、「図書館を題材にした」『映画』としては、「1. はじめに」でとりあげた、『図書館戦争』実写版が、2013年4月に公開されている。
- 21) たとえば、東京都足立区の図書館で、副館長として勤務していた、この図書館の指定管理者である会社の契約社員(50代女性)が、盗難防止シールの貼付業務に対する報酬のあり方をめぐって、抗議したところ、主張の一部は認められ、支払いが行われたが、女性は雇止めになり、「ユニオンに加入して、会社側と団交を続け、雇止めの撤回を要求している」ことが報じられている。
- 出典は、以下の通り。
- 「指定管理の労務実態 公務員の代替時給 180円」『AERA』vol.26, no.8, 2013.2.25, pp.58-59

## 4. 図書館の現実とフィクションの中の図書館

- 1) たとえば、
- フジテレビ系列「ココ調!」『めざましテレビ』2013. 4. 22. では、明治大学和泉キャンパス(杉並区)図書館(館内にカフェが併設)、成蹊大学(武蔵野市)図書館(ガラス張りのグループ閲覧室「プラネット」)、国際教養大学(秋田市)図書館(24時間開館)、が紹介された。
- 日本テレビ系列「NEWS ZERO」2013. 10. 8. では、成蹊大学図書館、国際教養大学図書館、大手前大学(西宮市)図書館(一般市民への開放)、が紹介された。
- 2) 竹吉優輔『襲名犯』講談社, 2013
- この作品には、実際の勤務経験をふまえ、図書館の状況に関して、開館準備の時間の職員の行動、利用者のクレーム電話への対応と図書館員の心理、レファレンスサービスの作業手順、などが詳しく記述されている。それに加えて、「国立国会図書館が統括する図書館専用のオンライン登録データベース」である「レファレンス協同データベース」の存在と、それへの「データ登録」に「ある利用者から『個人情報漏洩だ』とクレーム」があり、「レファレンスを受ける度に」データベースへの登録について利用者に尋ねると「怪訝な顔をされ、半数以上が拒否」(p.76)した、などの図書館業務の日常についての具体的な描写が含まれている。
- 3) 「謎解きは読者とのコミュニケーション 第59回江戸川乱歩賞を受賞した竹吉優輔(たけよし ゆうすけ)さん」茨城県地域情報紙『常陽リビング』, 2013. 8. 19 (<http://www.joyoliving.co.jp/topics/201308/tpc1308025.html>)
- また、雑誌『図書館の学校』に掲載されたインタビューでは、「今、うちの図書館で私の本は70人待ち」「読書の入口としての図書館」であってもいいと思っています」「これからも司書が続けながら“会いに行ける作家”になりたいと思っています」などと語っている。
- 出典は、以下の通り。
- 「interview 図書館を舞台に書いた『襲名犯』で江戸川乱歩賞 念願の作家デビューを果たした新人作家は図書館司書として働く32歳 竹吉優輔さん」『図書館の学校』2013冬, pp.48-49
- 日本図書館協会が刊行している『図書館雑誌』2014年1月号には、竹吉優輔によるエッセイが掲載され、「小説家として司書として幸福な一年であった」と記したうえで、「毎年大晦日まで開館している」という、竹吉が勤務している図書館の歳末風景を紹介し、「長編二作目の執筆」に取り組んでいることをアピールしている。
- 出典は、以下の通り。
- 竹吉優輔「新春エッセイ お節もいいけど図書館もね」『図書館雑誌』vol.108, no.1, 2014.1, pp.12-13
- 4) 紅玉いづき『サエズリ図書館のワルツさん』星海社(発売：講談社)2112, pp.290-292
- このストーリーに関しては「毎日愉快地に忙しく、本に囲まれ働きながら、『探しているの本がどこにあるの

か、手に取るようにわかればいいのに』と思っていました。ワルツさんが出来上がるきっかけはそんなささやかな願望でした」と述べている。

- 5) 紅玉いづき『サエズリ図書館のワルツさん 2』星海社（発売：講談社）2113, pp.248-252
- 6) 「余禄」『毎日新聞』2012. 3. 25, p.1
- 7) 現実の図書館状況を熟知している作者による、図書館を舞台としたフィクションの作品として、これまで、「図書館はどうみられてきたか」と題する継続的研究では、篠田節子、森谷明子の事例をとりあげてきた。『襲名犯』『サエズリ図書館のワルツさん』については、本研究の「図書館員出身作家のメンタリティ」の継続として、

佐藤毅彦「図書館員出身作家のメンタリティ 女性作家が描く女性図書館員像－図書館はどうみられてきたか・7－」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.42, pp.65-81, 2006. 3

佐藤毅彦「図書館員出身作家のメンタリティ その2 篠田節子のケースについて－図書館はどうみられてきたか・11－」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』vol.46, pp.13-27, 2010. 3

につづく、「図書館員出身作家のメンタリティ その3」で、取り上げる予定にしている。

（本文中で参照した web ページは、2013 年 12 月の時点で公開されていたものです）